

ツール・ド・モンブランを含めると5度目となった今年のスイス・アルプスは残された絶景ルートを訪ねて7日間の山歩きであった。



- 第1日 ルツェルンから列車、バス、ロープウェイでロートホルンへ。稜線で足ならしの後、山頂ホテルに泊まる。
- 第2日 SLでプリエンツ湖畔に下り、列車でクライネ・シャイデックに移動。アイガートレイルを歩いて、グリンデルバルト泊まり。
- 第3日 グローセ・シャイデックからフィルスを経由しファウルホルンに登り、山頂小屋に宿泊。
- 第4日 ファウルホルンからシーニゲ・プラッテまで歩き、電車、列車、ロープウェイを乗り継いでベットマーアルプまで大移動。
- 第5日 終日アレッチ氷河を眺めての周回コースを歩きベットマーアルプに連泊。
- 第6日 半日かけてサースフェーに移動、ホーサースに上がり展望周回路を歩く。
- 第7日 歩きなし。路線バスと列車でシンプロン峠を越えドモドツラを往復、サースフェーに連泊。

7月6日(水) 晴れたり曇ったり

プリエンツ湖からの有名な蒸気機関車は南斜面下りでの楽しみに残し、プリエンツ・ロートホルンには、北側からロープウェイで上がった。前夜空港から入った古都ルツェルンからまず列車でシューフハイム(Shuepfheim)へ、路線バスに乗り換えてソレンベルグ(Soerenberg)のロープウェイ乗り場、ゴンドラは10分余りで1200mを駆け上がり稜線上の山頂駅に到着した。

今日は初日、ロートホルン山頂周辺で軽く足ならしだ。

ステーションの横にあるホテルに余分な荷物を置き、まず山頂とは逆、西に向かって稜線を歩きだす。四囲を取り巻いている筈の峰々は、残念ながら雲の中。右手下のソレンベルグの谷からは、霧が切れ切れに上がってきている。左下にはプリエンツ湖、エメラルドグリーン of 湖面の水の色が美しい。湖面に漂う雲の影が何ともいえない風情を添えている。

十字架のあるピークまで1時間半かけて往復してから、ガイドブックに「評判がいい」とあったホテル併設の食堂で、野采大麦スープそしてビール(ただしクライネ)で昼飯をとった。昼からは稜線を東へ向かった。SLで登って来た観光客もいて稜線はかなりの人数、ロートホルン山頂(2298m)まで20分ほどをゆっくり登る。残念ながら山頂からの眺望は殆どなし、そのまま、アイ湖(Eisee)へのリフトステーションからロープウェイ山頂駅まで東進し、山頂の下をくり抜いた隧道(冬季スキー客用か)で戻ってきた。

まだ時間があつたので湖への下り道を View Point まで歩く。眼下に広がるプリエンツ湖と湖畔の村々の眺めを堪能してきた。

16時30分ホテル・Berghaus Rothorn Klumに入る。Berghaus(山の家)と称しているが本格的ホテル、日の出・夕焼けの山の眺めが楽しめる宿とのことで、明日朝を期待して早めに寝に着いた。



ロートホルン山頂を望む



プリエント湖に映る雲の影

第2日 SLで山を降りアイガートレイルを歩く（全長 5.6 Km、下り 700m）

7月7日（木） 終日快晴

日の出には遅れたが6時半前には起床。予測通り雲一つなく晴れ上がり、四囲の峰々が朝日に映えて、一大パノラマが広がっていた。北側から眺めるベルナーアルプス最高峰のフィンスタールホルン（Finsteraarhorn 4274m）が大きな姿を見せている。アイガー、メンヒ、ユングフラウの三山も朝の陽に輝いていた。

始発の9時48分、鉄道マニア憧れのロートホルン鉄道に乗り込む。ユングフラウ鉄道と同じ大勾配のアプト式登山列車だが、蒸気機関車はスイスではここだけ。傾斜の分だけボイラーを傾けた SL は、懐かしい石炭の匂いを漂わせて、広々とした草地の急斜面をゆっくりと下って行った。

湖畔のプリエント駅から、列車を乗り継いでグリンデルバルト（Grindelwald）、さらに登山電車でクライネ・シャイデック（Kleine Scheidegg）に移動した。駅のすぐ上の“Restaurant Nordwand”で、パンをくり抜いたボウルに入ったスープ。昨年と同じ組み合わせで昼飯を楽しんだ。その間に、人気のユングフラウ鉄道に空席が出た。クライネ・シャイデックから一駅先のアイガーシャイデック駅まで乗って行き、念願のアイガートレイルに向かう。

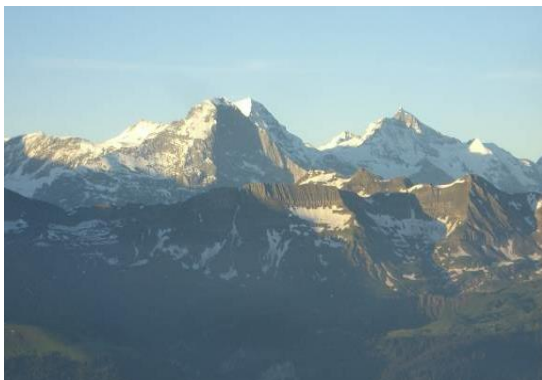
14時30分、駅の東側からすぐ山道に入り、北壁下の西端に立つ。右手前に、見上げるのに首が痛いほど岩壁がそそり立っている。正面には、ザレ道が北壁の下端を大きくうねっている。左手の谷には、昨年歩いた里道と鉄道線路が見下ろせる。大きな景色のなかを緩やかに下って行った。北壁直下の標識板で小休止。初登頂のルート図を現物の岩壁で検証、何とかトレースできたが、厳しいルートを目の当たりにして思いにふけた。

道の先にゴールのアルピグレン（Alpiglen）が見えているが、なかなか近づかない。スイスアルプスの大きさを感ずる。眺望も大きい。グリンデルバルト谷の大パノラマだ。西の峠クライネ・シャイデック（小さな峠）は左手後方、グリンデルバルトの街並みを越えた東端にグローセ・シャイデック（大きな峠）が見えている。明日からのファウルホルンからシーニゲ・プラッテまでの長い稜線も遠望出来た。壮大な眺めと心地よい風、快適なアルプスウォークだ。

アルピグレン駅の上部の岩稜帯から下りの岩道となり、標高差 250m を一気に下った。草付き道になって草花が出てくる、アルペンローゼに今年初対面。

17時30分 アルピグレン駅にゴール、3時間、5.6Km、満足のアイガートレイルが終わった。

グリンデルバルトの宿は昨年と同じ「Eigerblick」。部屋のヴェランダから眺めた夕陽に映えるアイガーが素晴らしかった。



ロートホルンからのアイガー・メンヒ・ユングフラウ



壁を見上げながらアイガートレイルを歩く

第3日 グローセ・シャイデックからフィルストを經由ファウルホルンに登る（全長 9Km、登り 700m）

7月8日(金) 晴

8時36分、宿の前から路線バスにのる。グリンデルバルト駅横のバスターミナルで乗り換え、谷の東端のグローセ・シャイデック(1982m)へ向かった。ここからヴェッターホルン(Wetterhorn3692m)の岩壁を左に眺めながら、快適なハイキング道で4Km先のフィルスト(First 2167m)を目指す。緩やかな登りだ。のどかなアルプ(牧場)が広々と続いている。

昨日と違って道の両側の草地に、花々が次々と出てきた。種類が多く、黄・赤・紫・青と彩りも豊か。密に咲いている花の色が草の緑と競り合っている。お花畑の向こうには岩峰群がどっしりと構えていた。ゆっくりと歩いて2時間余りでフィルスト着、ロープウェイ直行組と合流してすぐ昼飯。

次のターゲット、バッハアルプゼー(Bachalpsee2271m)までは、広い道幅の緩い登り道が続く。フィルストからハイカーの数が増えた、登りにも下りにも。時折、脇道をとりながら進む。左手から後方には、ベルナーオーバーランドの山々とグリンデルバルトの町並みが広がっていた。そして正面には、ファウルホルン(Faulhorn2086m)と山頂直下の小屋が垣間見える。コースタイム通りの55分でバッハアルプゼーに到着、山あいの静かな湖に四囲の山影が映えている。

ここからは本格的な登り、道幅も普通の登山道となった。「ファウルホルンまでは登り400m余りだ」と覚悟を決めて、ゆっくりと歩を進める。1時間程歩いて避難小屋(Reetihitta)で大休止、湖ははるか下になっていた。ファウルホルン小屋は見えなくなったが、稜線にある小さな建屋が次の目印。坂道はさらに急になる。小さなジグザグ歩行を多用して、ゆっくりゆっくり登った。

稜線に出た。反対のプスアルプ側の谷からの風が冷たい。今夜泊まるファウルホルン小屋までの急坂があらわれた。昨日、アイガートレイルから見た大雪渓が登路にないので一安心。先が見えてきたので急がずに、四囲の絶景を楽しみながらのんびりと登って行った。16時過ぎに小屋入り、フィルストからは“コースタイム”の約2倍だった。ここもBerghausと称しているが、全くの山小屋風。大部屋二段ベッドの下段に3人、7人と分かれて陣取った。18時の夕食まで、小屋入口脇のテラスでビール(さすがに生はなく瓶)としたが、寒さが忍びより身体が冷える。早々にベッドに戻ったが寒気は残った。

夕食はグリーンサラダとアルペンマカロニ、ワインで少し暖まって早々に寝床にもぐりこんだ。



お花畑のなかを歩く



バッハアルプゼーとヴェッターホルン

第4日 ファウルホルンからシーニゲ・プラッテへ下る(全長 9Km、下り 700m)～バットマーアルプに移動

7月9日(土) 終日快晴

朝飯前に小屋の回りを一巡、360度の眺望が広がって素晴らしいパノラマ・ビューだった。

北にはブリエンツ湖を挟んでロートホルンからの山脈が連なっている。蒸気機関車で下った広い緑の谷間も見える。南にはグリンデルバルドの谷の向こうに、ベルナーオーバーランドの山並みが朝日に輝いている。アイガー・メンヒ、ユングフラウ三山が、幾多の岩峰を従えどっしりと構えていた。

ファウルホルンからはまず急坂、すぐに緩やかな下り道となった。歩き易い広めの尾根筋を、4000m級がずらりと並ぶ峰々を愛でながらゆっくりと下る。北斜面のトラバース道で雪渓が出てきた。傾斜が小さくても雪が緩んでいて歩き難い。滑りながらいくつもの雪渓を横切った。

1時間半でMaendlenen Huette(2344m)、ここで道はUターンして東を向き、ファウルホルンを眺めながらしばらく歩く。間なしにもう一度180度方向転換、西を向いてシーニゲ・プラッテ(Schynige Platte 1967m)を目指した。右には浅い谷と花崗岩の対岸、

左には急峻な岩壁をみて、ガレ石の山腹道を歩いて行く。幾つもの下り、そして時折の緩やかな登り。周りには草が多くなった。小さな灌木も出てきた。

行く手の山あい、今日の歩きの終点シーニゲ・プラッテが顔を出した。まだ随分先だ。山道は、谷に沿って大きな曲がりて登り下りしている。ポピュラーなハイキングルートらしく、よく踏まれている。そして今日は土曜日、上り下りともハイカーが多い。ゆっくり歩いているので、どんどん追い抜かれる。親子連れとすれ違った、ファウホルンからフィルストまで足を伸ばすのだろうか。

シーニゲ・プラッテが見え始めてから中々近付かない。大きく谷に沿って曲がりくねった岩の多い道をゆっくりと下って行った。

“コースタイム”の1.5倍以上、5時間近くかけてゴールのシーニゲ・プラッテ登山

電車站に到着。駅のホームは「高山植物園」の帰り客もいて大混雑。2両連結の車両には通路はない、駅員が乗客をうまくコンパートメントへとさばっていた。麓のヴィルダースヴィール(Winlderswil)まで、標高差 1,300m の急勾配を下る本格的登山電車は、ブリエンツ湖やインターラーケンの街を見下ろしながらゆっくりと降りていった。

ヴィルダースヴィール駅からは列車。三回の乗り替え駅(インターラーケン、シュピーツ、ブリーグ)では、短い時間で慌ただしく乗り継ぐ。それにしてもスイスの列車(路線バスも)遅れが殆どない。シーニゲ・プラッテから 3 時間半、バツェンからロープウェイでベツマーアルプに上がったのは丁度 18 時、別送便受け取りにぎりぎり間に合った。ここもツェルマットと同じクリーンタウン、電気自動車で荷物を運んでもらい宿まで 15 分歩く。夏冬ともリゾート客で賑うというきれいなメインストリートに人影はまばらだった。



小屋横の展望スポットでユングフラウ三山をバックに



雪渓を横切る

第5日 アレッチ氷河を眺めての周回コース (全長 12Km、下り 700m)

7月10日(日) 晴

今日の行程は、アレッチ氷河(Aletschglescher)からメーアイエレン湖(Maerjelensee)を巡り、二つの峯(Bettmerhorn 2596m, Eggishorn 2926m)を大きく周回する絶景の道だ。

まず、宿近くからロープウェイでベツマーホルンの肩(Bettmergrat)にある山頂ステーション(2647m)に向かう。1700mを10分余りで上まで。いつものように谷側の窓から外を眺めていたら、遠くにあったマッターホルンがぐんぐんせり上がって来た。

ステーション脇の展望台では、南にヴァリスの山々の眺めが待っていた。マッターホルンの左手には、サースフェーからよく見えるドムとアランホルン、そしてモンテローザの4座、ワイスホルンの右奥にはモンブランも見えている。

そこから数分歩いて氷河展望台(Gletscherblick),ここには北のベルナーアルプの山々をバックに延々と流れているアレッチ氷河があった。ユングフラウを源に、長さ23Km、最大幅1.6Kmのアルプス最大の“大河”の流れは壮観。中にある二筋のモレーンは三本の氷河が合流した跡を示している。

9時40分歩き開始。すぐに大きな岩がゴロゴロしている下り道に入った。毎年、積雪で岩が動きまわるので、道が落ち着かず足場が悪い。急傾斜では特に苦戦した。緩い山道になっても、右手の山からの岩塊の崩落避けかの屋根付き道があった。

左手氷河からの涼しい風のなか、緩急の坂道を下って行く。氷河は延々と伸びていて、とにかく大きい。対岸にある氷河の末端や、流れの中の青い水たまりが、いくら歩いても同じ位置に見えて変わらない。氷河岸沿いの道との合流点ローティ・クンマ(Roti Chumma 2369m)は随分前から見えていたが、この350m下るのに2時間もかかっていた。メーアイエレン湖(Maerjelensee 2303m)まではアレッチ氷河沿いの平坦な道、ゆっくり歩いているので次々に抜かれて行く。老婦人からは「Beautiful weather, beautiful

and scape !」と声がかかった。確かに好天のなかの絶景だ。行く手氷河の奥にベルナーオーバーランドの山々。メンヒが見える。アイガーの山頂、ユングフラウヨッホと次々に姿を現わす。

右折してアレッチ氷河から離れた。広々とした氷河跡に残るメーアイェレン湖にきて小休止。志波ガイドが担いできてくれたトマトが美味かった。さらに 20 分歩いて大きな貯水池(Maerjelen- Stausee)の堰堤下にあるレストラン・Gletscherstube に入る。ほぼ満席の盛況であったが、ゆっくりとした昼メシができた。

導水管沿いに新たに掘られたトンネルで、反対側の谷に向かう。車一台が通れる薄暗い道は約 1Km、15 分で抜けた。出口の下方に旧道が見えていた。大回りをするのでこの道では 2 時間は余分にかかるという。

フィシャーアルプ(Fiescheralp 2212m)までは、大きくうねっている山腹道、左側に今度はドムス(Doms)の谷が続き、ヴァリスアルプスの峰々が連なっている。素晴らしく大きい眺めは、エベレスト街道の壮観さを思い出させた。

15時20分、フィシャーアルプに到着。期待していたバットマーアルプまでの路線バス(電気自動車)はなかった。エッグスホルン行きも諦め全員で歩きだす。アレッチ台地と呼ばれる大きなテラスの上、集落や牧場を縫ってゆく道は、高度差もなくよく整備されていて歩き易い。ドムス谷からローヌ谷へと続く大きなU字谷の先には、4000m級の岩峰が控えていて、絶景のなかの快適なアルプス歩き、足取りも軽くなりピッチが上がった。

16時40分、バットマーアルプに無事帰着。フィシャーアルプの標識には70分とあったこの間の“コースタイム”を全員がクリアしていた。累計の行動時間は7時間、長い一日であった。



アレッチ氷河沿い 屋根付き道



氷河の先にメンヒが見えた



ドムス谷を見下ろして

第6日 サース・フェーに移動 ホーサースに上がる

7月11日 (月)晴れのち曇り後雨

今日はサース・フェー(Saas Fee)への移動日、時間と天候次第で周辺を歩くこととなる。

いつものように朝飯は7時30分、8時15分に宿を出てロープウェイステーションまで歩く。別荘やリゾート・ホテルが並ぶ道には爽やかな朝風が通り抜けていた。

順路とは逆に、ロープウェイ、列車と乗り継ぎブリーグへ。ここからは路線バスでサース・フェーに向かった。何度か通った道、ツェルマットへの分岐点ステルデン(Stelden)の急坂も懐かしい。

サース・フェーのステーションで、宿の主人に出迎えられ荷物をデポする。バスで一駅戻ったサースグルンドからロープウェイ。中間駅クロイツボーデン(Kreuzboden)で乗り継ぎ、ホーサース(Hohsaas 3200m)までの1700mを一気に駆け上った。

天候もあやしくなったので昼飯前にと、すぐホーサース・ステーションの上部の展望周回路に向かう。それぞれ4000m峰を見渡すことが出来る展望ポイント18ヶ所を順に回る道だ。岩ゴロゴロの登り坂に次々あらわれるポイント、そのケルンに銘板が埋め込まれていて、解説とともに写真があり、振り返って実物と照合できる。モンテローザ山群の4座も頭をのぞかせていた。雲に隠れていた峰々の勇姿も思い描くことができた。

周回路に雪が出てきて苦戦が始まる。前進できない箇所もあり、いくつかはパス。歩みも遅くなり、道標では35分の周回路を、85分もかけて戻って来た。後ろに聳えるヴァイスミース(Weissmies 4027m)から落ちてきている Triftgletcher の氷河末端が、ステーションの手前に大きく広がっていた。色が変わっているところもあり花崗岩と見紛いそうだった。ステーション横のレストランで昼食後、クロイツボーデンまでロープウェイで戻る。近くにあるベルグゼー(Bergsee)周辺を小散歩。雨もパラついてきたのでバス道路までの

下り歩きは取りやめて、サース・フェーに直帰した。宿は去年と同じ Hotel Alpin, 顔なじみの主人のもてなしには心配りがあった。美味そうなスイスの白ワインを探りあてて盛り上がった。



ベットマーアルプの爽やかな朝



展望周回路 岩と石の道だった

第7日 シンプロン峠へ バスで越えて列車で戻る

7月12日（火） 終日雨

今日も雨模様なので山歩きは取り止め、有名なシンプロン(Simplon)峠へ向かう。

8時52分サース・フェー発の路線バスでブリーグへ、10時05分発のドモドツラ(Domodossora)行きに乗り換えた。ポストバスは列車の窓から見えていた高速道路を緩やかに登る。集落も牧場は何もなく、木々の緑が色深い。峠に近付くとハイカーの姿、山道はあるようだ。50分程で峠に着く。特に目立つものはなし、ハイカーなど三人が新たに乗り来た。

峠から緩やかに谷を下って、Simplon Dorf, 一応ホテルもある山あいの村落だ。道は少し急になり屋根付きも出てきた。激しい雨のなかドライバーは慎重に運転している。Gondo との地名、国境らしく検問ブースがある。ドライバーから「シートベルトを締めろ」とアナウンスあり、国が違ったことを実感する。

90分走って、ドモドツラに到着。イタリアによくある中都市、駅前の並木道に古い建物が並んでいる。その一角のイタリアンで昼飯、本場のパスタと赤ワインは美味かった。

ドモドツラの駅はごった返していた。北イタリアとスイスを結ぶ古くからの幹線は人と似の往来が激しい。ベルン行き国際急行列車も満席。ループを過ぎて長いトンネルで国境を越える。イタリー・スイス両国のポリスがそれぞれ巡回にきて、乗客に(全員ではないが)パスポートの提示を求めていた。テロ対策の一環か。ブリーグからいつもの路線バスでサース・フェーに戻る。雨は少し残っていたが、三々五々、買い物や散策に、スイスアルプス最後の午後をエンジョイしていた。



シンプロン峠越えのポストバス(路線バス)



ドモドツラ駅前の並木通り

以上